

日本IT書紀

171 創造

09 玉錠篇
卷之二十三 纏綿

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第七十一

創造

一

本来であれば、これから語る人物は、もつと早くに登場していなければならなかつたかもしれない。だが、機が熟さなかつた。

東京・中野の地下鉄丸の内線「新中野」駅から歩いて六、七分の住宅街に、日本ホルスタイン会館という建物が建っている。社団法人日本ホルスタイン登録協会の所有であつて、乳牛の品種改良や搾乳技術の改善、事業者の指導などを行つてゐる。

構造計画研究所の本社は、その中にある。

業界記者としてそこそこの仕事をしていながら、筆者がこの会社に足を運んだのは数度でしかない。筆者が勤めていた新聞社は記者ごとに担当する分野とエリアを定めていて、その組み合わせで取材活動を行つてゐた。構造計画研究所が山手線の外側にボツンと存在してゐたこともあつて、特別のことがないと出向くことがなかつた。

だけでなく、その人々を失つたあとの同社は、
——地味で堅実な、どちらかというのと取っ付きにくい会社。
というイメージが強かつた。

だが、本書の執筆に当たつては事情が異なる。

当初から視野に入つてゐたのもちろん、井戸の底に横たわるコインがときおりの光を受けて煌くように、常に意識を揺さぶられていた。にもかかわらず真つ先に取材に行かなかつたのには理由があつた。

——当時の証言がおおかつた集まつた最後。

と思ひ決めていたからである。

——「そこ」は最後にたどり着く場所であるべきである。というの、むしろ筆者の独りよがりには違ひない。

日本ホルスタイン会館の前に立つたのは、取材をスタートして八か月が経つたところである。応対してくれたのはコーポレートマーケティング室の佐藤仁宣氏だつた。事前にある程度の説明は済ませていたが、詳しくは説明していない。だが阿吽の呼吸というのだろうか、話を持ち出しただけで同氏は、

「ご案内しましょう」

と立ち上がった。

本社のオフィスから出て路地を抜け、表通りに向かう。

「新しい本社ビルの最上階に移したのです」

案内をしながら佐藤氏は

「当社は研究所を名乗っていますが、所長はただ一人しかいないのです。それとつい最近、メモリアルホールでなく、メモリアルルームに改称しました」

子息・正太氏にバトンが受け継がれたためであろう。

ガラス張りのその部屋に通された。

机、資料棚、卓上ライト、ペンやメモ、蔵書などはかつてのままであるという。

正面に一葉の写真があった。

それと知らない人が見れば、

——どこかの大学の先生。

と思うに違いない。

広い額にロマンズグレーの髪、黒ぶちの眼鏡の奥からジツとこちらを見つめている。

熱いものが込み上げてきた。

五十歳を超えた年になって、図らずも、だった。

服部正。

作曲家に同姓同名の著名人がいるが、この人物の場合は、「正」と書いて「まこと」と読む。建築設計と構造解析で

多くの論文を残しているのだが、ITの世界ではまさに「ソフトに賭けた人」ということになる。

一九二六年の十二月、わずか七日間しかなかった「昭和元年」に東京の青山に生まれ、一時期を山梨で過ごしたのち、五一年東京工業大学の工学部建築学科を出た。大学の卒業が遅れたのは、途中で第二次大戦という虚しい時間が割り込んでいたためである。

いや、服部において虚しかった、といっているのではない。金岡幸二と山本卓眞が中国・奉天の飛行隊で、二百五十キロ爆弾を抱えて敵に突っ込むことを覚悟したとき、塚本祐造が、いつエンジンが吹き飛ぶかも分からない「烈風」試作機に乗り込んだとき、虚しさを感じていたかどうか。

ただ、その後の歴史の視点で眺めたとき、もし服部が競争を体験していなければ、そして順調に大学を卒業して社会に出ていれば、果たしてソフトウエアや情報サービス産業とかかわりをもつことになったか、という（ほとんど意味のないことだが）想像を惹起する。それほどに彼の人生がソフト／サービス産業に果たした役割は大きかった。

ところで、服部が大学に通っていた四六年から五一年のころは、朝鮮戦争、日米講和条約ばかりでなく、政治、経済、社会のすべてが焦土から脱皮しようともがいていた時期だった。

中央省庁には賠償庁、経済安定本部、物価庁、中央経済安定庁など当時ならではの役所があった。商工省が通産省

に衣替えした直後、今度は通信省が電気通信省と郵政省に分割される、という具合に変化が激しかった。

その電気通信省に入った。

郵政省は郵便と貯金、電気通信省は電話と電波という区分けである。戦後復興の第二段階に入った日本は、道路を作り、橋を渡し、電線を張り、通信ケーブルを巡らせる作業が急ピッチだった。ことに電気通信網の整備は、連合国軍最高司令部（GHQ）と駐留アメリカ軍が実質的に指揮を取った。

この時代の電気通信機器をほぼ一手に手がけていた日本電気の売上高は、四九年度下期が八億七千三百四十三万六千円だったのに対して、五〇年度上期は十一億六千九百六十七万五千円、同年度下期は十六億一千六百五十七万五千円と驚異的に伸びている。建築科の学生が電気通信省に求められたのは、そうした事情によっていた。

以後、服部は郵政省（五二年に電気通信省を統合）に三年間勤め、三十歳になった一九五六年六月に独立して建築設計事務所を開き、五九年五月に「株式会社構造計画研究所」を設立、七〇年ソフトウェア産業振興協会の設立に奔走し、七二年会長に就任した。

八三年一月の、その日——服部正の死——がなかったなら、われわれは、八四年五月に実現した業界団体の統合、

八五年に制定された労働者派遣事業法に基づく「ソフトウェア業」の業種指定、九〇年度まで五年間にわたったソフトウェア生産工業化システム開発プロジェクト（いわゆる「Σシステム」）、九二年秋に表面化した深刻なソフト不況などについて、予言に満ちたコメントを聞くことができたであろう。

ただし、そのことはこの節の主題ではない。

では何がテーマかというところ、

「服部は建築技師であった」

ということである。

その彼がいかなる理由でソフトウェアというものにかかわり、なにゆえにソフトウェア産業の育成・振興にのめりこんでいったのか。

いかにも興味あるところではないか。

二一

構造計画研究所の資料によると、創業前のある時期の実績として、「某社銀座ビル（塔状建物）構造設計」とある。社員を抱えていなかった個人事務所のととき、服部は徹夜に徹夜を重ねて机に向ったのであろう。

直接は何かかわりもないのだが、日本電子開発の松尾

三郎が同じように、通信省から通信ケーブル用の鉄塔の設計を経て土木コンサルタント会社を指向した過程と重なっている。塔の設計は、鉄骨の組み合わせ形状を図面で引く以上に構造解析のウエイトが大きい。すなわち方程式のかたまりなのである。

次いで服部は、和歌山城、熊本城の天守閣の構造設計を受託している。

この時期、面白い現象が起こっていた。

全国のおちこちで城の修復、天守閣の再建が活発に行われたのだ。一つには第二次大戦の戦災で、城が焼けた。GHQが上陸して全国の都市を占領したとき、日本人の多くは萎縮していて、実際、近代戦争には何の役にも立たない江戸幕藩体制の遺物を修復するどころか、わざわざ取り壊し、濠を埋めて恭順を示そうとした。

その反動が顕在化した。

むろん、別の動機もあった。

町のシンボルを復興させよう、という回帰現象である。さらには、ようやく生活が安定してきたので、旅行に出るという行動が一般に行われるようになった。観光資源として、城はいちばん目立つし、絵になりやすい。

天守閣に人を登らせて、入場料を取る。

姫路城、松本城、熊本城、松山城、弘前城などは、江戸

幕藩のころからの遺構であった。であるがゆえに、大規模な補修が必要だった。会津鶴ヶ城、大阪城、名古屋城などは、コンクリートで新たに建造されている。新造であると分かっている、人が群がった。

設計図面を描くには同じような計算を、繰り返しさなければならぬ。係数が違うだけで、方程式は同じではないか手廻し式のタイガー計算器では、繰り返し演算が自動でできなかつた。富士写真ファイルの岡崎文治、日本電子開発の創業者・松尾三郎が電子計算機に目を向けたのは、

——計算機を使えば、五十人が二年かかる計算が三日で終わる。

ということだった。岡崎はカメラ用レンズの設計を通じて、松尾は東京タワーの建設と、橋梁設計の仕事を通じてそのことを知った。

ときを同じくして、服部も同じことに気がついていた。

夏の灼熱に焼かれたときと、真冬の吹雪に晒されたときの鉄の膨張率と収縮率、地震のときに建物がどのように撓むか。そのような計算を電子計算機はたちどころに済ませてくれる。

『ソフトウェアに賭ける人たち』（梅澤隆、内田賢、コンピュータ・エージ社）は、

構造計画研究所を株式会社組織にした時から、服部は建設設計に必要な構造設計にとってコンピュータが有力な武器になると予感していた。

と記す。

たしかに彼の判断は合理的であった。

建設物の構造設計は理詰めの世界である。

構造計画研究所の資料は、次のように書く。

—— 計算尺やタイガー計算機で構造計算を行った時代はもはや二昔も前の事になりますが、そんな時代にIBMの電子計算機と構造設計を結びつけることに狂奔した男がおります。当所の創業者・故服部正でした。

—— 構造体の中を力がどう流れているのか、変位法解析でまともに取り組んでみたい！

—— 同じ設計期間のなかで、十ケースも二十ケースもスタディを繰り返して、施主に最良の設計を提供したい！

第1の夢は、日本の構造設計界の常識になるまでに結実させました。日本で稼働している構造設計プログラムの源流は当所にあると言っても過言ではないと自負しております。

第2の夢も、ここ数年のハードウェアの飛躍的な進歩を背景として、会話形式のコンピュータ・エイディット・デ

ザインとして結晶させつつあります。

筆者において、このことに口をはさむことはない。事実、そうだったのである。また筆者においては、その生身の姿を浮き彫りに描くのに十分な材料を持ち合せていない。

—— だが、それだけだったのか。という素朴な疑問があった。

三

メモリアルルームで対面を済ませたのち、筆者は再び佐藤氏と向き合っていた。

取材の主旨を説明し、原稿の一部を渡しながら、「ここまで書いてきて、いくつか服部氏について疑問があるのです」

筆者は言った。

疑問というのは、服部のあと社長を受け継いだ富野壽が——ソフト協が設立される前から、富士通の池田敏雄さんや通産省の平松守彦さんなどと親しくしていた。

と語っていることである。

「前後の関係が一致しないのです」

佐藤氏は、根気よく筆者の説明を聞いてくれた。

平松守彦は電子工業課長補佐のあと、六四年に企業局産業公害課長として異動し、六五年六月鉱山局石油計画課長、六七年十月貿易振興局輸出保険課長の職にあった。再び電子工業課に戻るのは六九年のことだから、服部が接触したのはソフト協設立の直前ということになる。

ところがそれだと「ソフト協が設立される前から、富士通の池田敏雄さんや通産省の平松守彦さんなどと親しくしていた」という証言と辻褄が合わない。

平松の証言によれば、電子工業課長補佐のころ、服部は平松と接触を持っている。服部との接触を通じて平松は「ソフトウェア」というものの存在を知った。

「また、もう一つの疑問は、なぜソフトウェアに注目したのか、ということですよ」

大卒初任給が二万円そこそこだった時代に月額レンタル料が六十万円もする「IBM1620」を入れたのはなぜか、という疑問があるが、それは「無謀であった」の一言で説明がつく。松尾三郎が後述しているように、電子計算機の威力に感服したのである。

電子計算機を使うことは、合理的な解だった。であれば、なぜ松尾が計算センターを志向し（紆余曲折を経て彼の会社もソフトウェア業になったが）、服部が最初からソフトウェアを志向したのか。

「そこで、次のような仮説が成り立つように思います」松尾三郎は、複雑な計算が早く終わること、条件を変えて同じ計算を何度も繰り返し返せることに注目した。だが、服部の場合は計算の作業そのものに飽きた。

彼の頭脳は、方程式から導かれる「数値と現実の世界」との関係を社会に置き換え、新しい社会の構造を創造することに魅力を感じるようになっていった。

彼は方程式を解きたかたのではなく、新しい価値を創り出したかたなのだ。しかるのち「世界を創造すること」に、より大きな魅力を感じていった。

おそらく、ではないが——。
大それたこと。

と人は言うであろう。

だが、世の中には本の一握りだが、そういう精神構造を持つ人間がいる。西郷隆盛がそうであった。勝海舟もその類例であった。西郷と勝に愛された坂本龍馬という男もそうだった。彼らは新しい時代の扉を開けることに、強く心を惹かれたのだ。

服部は社会全体をも含む「システム」のかたちに興味を抱き、新しい世界を創造することに魅力を感じるようになった。そのように筆者が想像するのは、社外の人材にも応援の手を差し延べているからだ。

「軸対称シエルの弾塑性大変形問題の差分法による数値解析とその応用」

という難しいタイトル（ばかりでなくその中身も）の研究をしていたある大学の助手に、服部が資金を提供していたことは、ITサービスマ業界ではあまり知られていない。

服部がスポンサーとなり、あるいは激励した若手の研究者は、おそらく一人や二人ではない。

むろん、そこに構造計画研究所の経営者として、有益であるという判断が働いていたことは否定しない。有限要素法や振動解析技法、流動化現象解明技術などに没頭する若手研究者を支援することが、ひいては自社にとって有利に働く。功利があつておかしくはない。

だが、それだけではなかった。彼は新しい世界、新しい価値観を作ろうと決意していたのではないか。

ソフトウエア産業振興協会の前身である「四社会」が発足したときから服部は加わっている。「四社会」というのは元日本能率協会EDP研究室部長で日本EDP副社長だった中島朋夫が提唱し、コンピュータアプリケーションズの大久保茂が共鳴し、日本ソフトウエアが参画した。

服部はこのときから俄然、猛烈に動き始めた。

だが、当時——一九六八年だが——、構造計画研究所の売上げのうち、ソフトウエアは二割に満ちていなかった。

しかもそのソフトウエアは、建造物の基礎設計積算プログラムであったり、構造解析プログラムであったりした。

日本EDPやコンピュータアプリケーションズが指向したビジネス・アプリケーションの受託開発とは、ずいぶん色合いが異なっている。

——ここに「ソフトウエア」という新しい世界が、手つかずのままある。

ということを示した人物ないし、きっかけがあつたのではないか。それを発見して、服部は「世界の創出」に勇躍したのではないか、というのが筆者の仮説だった。

歴史研究者のいやらしいところは、なにごとにも因果関係で考えることである。現象には必ず遠因があり、プロセスがあつて、その現象が生み出したテーマないし価値観（それは物質的な何かであるかもしれないが）が次の現象の遠因になる、という発想である。

グラハム・ハンコックのような飛躍は、通常の史学者はしないし、もししたとすれば、現在の学界において彼は、もはや史学者でなく、空想者になってしまう。

それゆえ、例えば神奈川県夏島貝塚から、炭化した貝殻の堆積とともに出土した砲弾型の、いわゆる尖底土器に對して、「紀元前一万二〇〇〇プラスマイナス五〇〇年」という編年が与えられたとき、圧倒的多数の考古学者が

「そんなことはあり得ない」と発言した。

なぜなら、土器はメソポタミア文明の中で農耕とともに熟成されるべきだったからである。魚介類を海水で煮沸して食するために土器が形成された、などということは、農耕を軸とする史観ではあり得べきことではなかった。

だが、放射性炭素C¹⁴の測定結果は、それとは違うことを示していた。

のちのち、いくつかの発見によって、

——土器は漁労採集の生活様式の中から発生した。

ということが、因果関係をもつて説明することができるようになった。

筆者においても、発想は同じである。

現在に残る資料のうち、服部の足跡を記録するのは『ソフトウェア産業振興協会十四年史』（一九八四、ソフトウェア産業振興協会編）であると筆者は考えてきた。

その『十四年史』には、一九六八年に存在した「四社会」のことが記録されていて、いきなり服部が登場している。

グラハム・ハンコック的な飛躍が必要なのだろうか。

補注

日本ホルスタイン登録協会 一九四八年発足で、現在の本部は東京都中央区京橋一―一九一八、英文略称は「HCJA」。同協会の定款には「ホルスタイン種牛の優良な血統を保存普及し形質の改良と能力の向上を図りあわせて会員相互の利益を増進することを目的とする」とある。

戦後の日本電気の売上高 『日本電気株式会社百年史』による。

Σシステム 通産省主導の大型プロジェクト「ソフトウェア生産工業化システム」の通称ないし同プロジェクトが構築を目指したシステムの名称。「Σ」は数学で「総和」を意味する記号として用いられる。

一九八四年、都市銀行の第三次オンラインなど超大型汎用機をセンターマシンとする大規模システムのアプリケーション開発需要に対応するため、ソフトウェア技術者の絶対的な不足が指摘された。通産省は株式上場企業や主要なコンピュータ・メーカー、情報サービス会社、教育機関などを調査した結果、「自然増を差し引いても二〇〇〇年にソフトウェア技術者が六十五万人不足する」と予測した。そこで構造化プログラミング技術を応用し、かつセンターマシンに基本的なソフトウェア・モジュールをデータベースとして蓄積してネットワークで利用できるソフトウェア開発環境を整備する必要があると判断し、五年間・総額二百五十億円を投入するプロジェクトをスタートさせた。

このプロジェクトによりUNIXを搭載したエンジニアリング・ワークステーションが脚光を浴び、オムロン「LUNA」、ソ

ニー「NEWS」などが製品化された。Σシステム自体は事実上失敗に終わったが、ソフトウェア開発環境の整備が必要という認識が高まり、コンピュータを利用したシステム設計ツールが普及した。またプロジェクトに参加した多くの技術者が構造化プログラミング技法やモジュール・エンジニアリング技術を習得した。

夏島貝塚 なつしま・かいづか・横須賀市夏島町にある。京浜急行「追浜」駅前商店街から工場埋立地の広い道路を進むと樹木に覆われた一画が現われる。貝塚は小山のような林の中に残されているが、金網がめぐらされ立ち入りは禁止されている。その隣には「明治憲法起草地記念碑」がある。かつては東京湾内の小島だったと考えられ、一九五〇年から五五年にかけて明治大学考古学研究室が発掘したところ貝塚とともにそれまで例のなかった尖底土器が出土した。放射性炭素C14による測定で「九二四〇±五〇〇B・P」という結果が出た。

また撚糸(よりいと) 文系の井草式、大丸式と夏島式の新旧関係が確実に把握され、礮器・局部磨製石斧、石皿、釣針などが多数件出した。釣針はイノシシの大腿骨、鹿角でできており長さが約三センチメートルもあることから大型魚類をねらったものと推定されている。

グラハム・ハンコック Graham Hancock / 1950 ~ スコットランドのエジンバラに生まれ、幼年時代はインドで過ごした。その後、イングランド北部のダーラム大学で社会学を専攻、一九七三年以後、「タイムズ」「サンデー・タイムズ」「インデペンデント」「ガーディアン」などイギリスを代表する新聞、雑誌に記事を書き、ジャーナリストとして認められた。八一年から「ジ・エコノミスト」の東アフリカ特派員を務めた。古代遺跡を推理する評

論を九二年に『神の刻印』の名で出版、次いで世界各地に存在する古代遺跡の「あり得べからざるもの」を克明にレポートする中から、現在知りうる人類の「有史」以前に超古代文明が存在したのではないかとする仮説を『神々の指紋』で提示した。世界各国で翻訳されベストセラーとなったが考古学的・民俗学的には評価されていない。ガーディアン紙は、「ハンコックは、素人探偵による知的推理小説という新しい分野を開拓した」と論評しており、おそらくこの評価が妥当なところであろう。

日本IT書紀 171 創造

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。